ＡＬＬＢＬＡＣＫＳの名、編集者のミスから

来2019年秋、初めて日本でラグビーのワールドカップが開催される。第1 回1987年から4 年置きで今回が9 回目。ニュージーランドが3 回優勝し、オーストラリアと南アが2 回イングランドが1 回優勝している。NZのナショナルチームであるオールブラックスの圧倒的な強さが目立つが、なぜそんなに強いのか、その秘密をさぐってみたい。

「一人は皆の為に、皆は一人の為に」

NZチームは2009年から世界ランク1 位。NZにラグビーが導入されたのは1868年。1892年アマチュアの集まり、フットボール・ユニオンが出来、その選抜チームがオールブラックスである。だが最初は、この名ではなかった。

1905年の英国遠征では、32勝1 敗と恐るべき強さを発揮した。この時のチームは、バックスの攻撃参加による連続的なスイングプレーの導入で、相次いで得点を挙げた。新聞記者は「選手が全てバックス(All Backs) のようだ」と書いたところ、NZの選手がたまたま上下黒のユニフォームだったので、編集者が、バックスは「ブラックス」(黒) の誤りではないかと思って、L の字を書き入れてしまった。NZ側もこの名称を受け入れ、以来誇りを持って海外との試合に臨んでいる。

オールブラックス
（ハカ＝儀式）

「カマテ　カマテ　カオラ　カオラ」黒のジャージーに身を包んだ15人の男が、試合前に中腰で踊る儀式は「ハカ」と呼ばれ、マオリ族の戦闘開始の合図を真似たものである。ニュージーランドでは、海洋民族で体力的に優れたマオリ族とアングロサクソンとの混血が進んでいて、国民の体力強化に貢献している。

やや横道にそれるが、ニュージーランドは「アオテアロア」(白い雲のたなびく国) とマオリ語で呼ばれ、国歌「God defend NZ 」も1 番はマオリ語、2 番は英語である。マオリの人達のNZでの立場がわかろう、というものだ。

NZのチームの強さについて考えてみたい。第一がスポーツ好きの国民性である。この国ではスポーツとリクリエーションは同義語である。ある調査で、18歳以上の男子のうち、過去1 年以内に8 割の人が何らかのスポーツを行い、3 割がスポーツクラブに所属し、3 割の人が競技としてスポーツをしている。

「ノーサイド」

人気のあるスポーツは、ラグビー、ネットボール、ゴルフ、クリケットの順。ラグビーは国技とされている。ニュジーランダーが大切にするのは、家族、スポーツ、友人の順。子供たちが、集まって遊ぶのが、ラグビーごっこである。「タッチ・ラグビー」ともいわれ、相手側の子供の頭と体の一部に触ると、ボールがデッドになる。接触プレーによるけがの回避が目的である。日本でもタッチ・ラグビーが関西方面から浸透しつつあり、ラグビーの普及によい効果をもたらしている。

ラグビーは最初、英国のパブリックスクールで始まった。当初は体を蹴ったり、格闘技に近いものだった。その後、パブリックスクールのラグビー校が、現在の規則を作った。ラグビーの名はこの学校名に由来する。

私が好きなのは、ラグビーの試合終了を告げる「ノーサイド」という言葉である。敵味方に分かれて激しく戦っても、試合が終われば敵味方ではなくなる、という意味である。何と公正なことだろう。公正といえば思い出すことがある。仏の」・デュビビエ監督の映画「大いなる幻影」。第一次対戦中。ドイツ軍の捕虜収容所に収容されていたフランス兵が脱走する。追いかけたドイツ兵は、逃げた捕虜がスイス領に入ったことを確認して射撃を中止する。スイスは永世中立国である。

日本はニュージーランドに5 戦全敗。だが日本も強くなっている。カップ前哨戦の今年11月3 日調布の味の素スタジアムのオールブラックス戦が楽しみである。(小林)

ラグビー校(Rugby School)は、ウォリックシャーのラグビーにある、イングランドで最も有名で最も古いパブリックスクール(名門私立学校)の1つである。

（Rugby School）